

## 1. 「壁抜け男」 賜物を生かしているか

自分の自分らしさ、賜物、力を存分に生かすことは、簡単なことのように、実は簡単なことではありません。そのことを思いめぐらすにつけ、私はフランスの作家で、マルセル・エーメという人の短編「壁抜け男」という作品を思い起こさずにはいられなくなります。短編ですから 30 分もあれば読めます。ちょっと諷刺の利いた愉快ではありますが悲しい小説です。内容はこんな具合です。

パリに住むうだつのあがらない下っ端役人デュチュールは、43 歳になったある日、自分にはどんな壁でも通り抜けることができる特別の才能があることに気づきます。そんな年になるまで、自分独自の素晴らしい才能があることを知らないでいるのも不思議ですが、彼は、自分が望んで手に入れた能力でもなかったのもので、その才能を利用しようとはしません。なんと医者に行って、治療してもらおうとするのです。また奇妙な医者がいるもので、その医師は彼の症状をきちんと診断し、1年に2包の割で服用する薬を処方してくれました。それを飲めば、壁を通り抜ける才能を消すことができるのです。ところが、デュチュールは 1 包だけ飲んで、その薬のことをすっかり忘れてしまいます。もちろん壁抜けの技術を使うこともしませんでした。

ところが、自分の職場に新しい上役がやって来て、デュチュールの手紙の書き方に難癖をつけ、様々な嫌がらせをします。ついには、物置のような部屋に追いやられてしまいます。その時、デュチュールは自分に与えられた才能を用いることに気づきます。上役が仕事をしている壁から、にゅっと首を出して、思いっ切り罵詈雑言を浴びせかけ、すっと姿を消してしまうのです。何度となく繰り返すうちに、この上役は、神経を病み、ついに救急車で運ばれ、精神病院に入院してしまいます。

味を占めたデュチュールは、それを契機に自分の才能に俄然、興味を持つようになり、壁を通り抜けたという欲求に取りつかれます。それは外部へ広がりたいという欲求、自己を実現し乗り越えたいという高まりでした。けれども不幸なことに、この才能を用いて何をしていいのかわかりません。彼は新聞を広げます。まず初めに、政治欄とスポーツ欄のなかになすべき課題を探します。しかしそこには壁を通り抜けることができる人間の興味をそそるようなものは、何もありませんでした。そこで、彼は三面記事のほうに関心を向け、見事に暗示を受けるのです。それは泥棒になることでした。彼は銀行や、宝石商や、金持ちの邸宅など、どこでも、何でも通り抜けて、たちまち大泥棒になります。新聞は 狼男 と書き立て、フランス中がその話題でもちきりです。ところが、大泥棒である自分に、誰も気づいてくれません。そのことがどうにもデュチュールの癪の種になります。「ねえ、諸君 狼男 はこのわしだよ」と言いふらしても、同僚たちは冷笑するだけで、信じてくれません。ついにわざと捕まってみせるのです。何度捕まっても大丈夫。裁判を受け、刑務所に入れられても、またすぐに出てこられるのですから。ところが、だんだんそんなことにも退屈してきます。

結局彼は、街を歩いている時に一目惚れした女の家忍び込むようになるのですが、あ

る日、突然デュチュールは頭痛を覚えて、引き出しにあったあの薬を、考えもなしに午前と午後1服ずつ飲んでしまいます。そしてそのまま、再び女の家に出かけてしまいました。ところが翌朝、家を出るため、ちょうど彼が壁の中を通り抜け始めた時に、薬が効き始めて身動きが取れなくなってしまうのです。今でも、壁の中にデュチュールが塗り込まれたままになっていて、街のどよめきが静まった深夜、その壁の側を通ると、彼の泣き声が聞こえてくるはずだと言って、その短編は終わるのです。

とても滑稽な話です。しかしどこか背筋が凍るような思いも抱かされます。とりわけ印象深いのは、こんなに素晴らしい才能を与えられているデュチュールが、上司を罵倒するためにこの才能を用いた後、新聞を開いて一所懸命、自分の素晴らしい才能を生かす目的を見出そうと思いながら、政治面を見てもちっとも心動かず、スポーツ欄を見ても暗示を得られず、三面記事を見て泥棒になることと、女の家へ忍び込むことにしか、やる気が起こらず、結局、壁に塗り込まれたままになってしまったということです。せっかくの自分の自分らしさを、素晴らしい才能を彼は見事に台無しにしてしまうのです。まことに悲しい話ではありませんか。

## 2. タラントンの譬え話

主人に信頼され、代理人として生きる僕

さきほどお読みいただいた「タラントンの譬え話」にも、デュチュールと同じような人が登場してくるのではないのでしょうか。この譬え話において、主人は自分が留守になる間の財産の管理を、3人の僕に委ねます。5タラントンを預けられた者が、さらに5タラントンを儲け、2タラントンを預けられた者が、さらに2タラントンを儲けます。ところが1タラントンを預けられた者は、土の中に埋めたまま放置してしまいます。この主人は、儲けを出したそれぞれの僕には、「忠実なよい僕だ。よくやった」と祝福の言葉を告げるのです。

ここで「忠実」と訳された言葉のギリシア語は、ピストスという語です。「信仰」という言葉のギリシア語は、ピステイスですから、「忠実」と「信仰」は親戚関係にあるということが分かります。この譬えの主人とは、神のことを指していますから、「忠実」とは、神に向き合い、神との関わりがしっかりしている者ということでしょう。つまり、ただただ自分のまわりの人間関係、水平の次元にきゅうきゅうとなるのではなく、まずもってしっかりと神を見上げつつ、神を信頼して歩む人のことを指しています。

しかし、ここで大切なことは、この僕の忠実さは、何によって引き起こされているのかということです。それは主人の僕たちに対する一方的な深い信頼によるのではないのでしょうか。その信頼は、この主人が多額の財産を、なんの条件もつけることなく僕たちに委ねていることからよく分かります。

タラントンという言葉は、気づいた方もおられるでしょうが、英語のタレント、つまり、生まれつきの才能、適性を意味する語の語源となった言葉です。当時のギリシアの通貨の単位で、6000ドラクメにあたります。1ドラクメは、労働者の日当にあたりますから、労働者の6000日分、つまり労働者の16年から17年分の収入に匹敵する金額となります。いささか厳密さに欠けますが、思い切って現在の金額に直せばおよそ1億円ということになるのでしょうか。そんな大金を主人は、躊躇なく5タラントン、2タラントン、1タラントン

と 3 人の僕たちにぼんと委ねたのです。そこに主人の僕たちに対する深い信頼の思いがあったからです。

生まれながらに与えられた固有の能力を用いて、固有の使命に生きる

ところで、この譬え話に聞き入りながら、皆さんは素朴な疑問を抱くことはないでしょうか。どうしてイエスは、こんな不平等な譬えを語られたのだろうか。イエスなら、僕を分け隔てすることなく、平等に財産を委ねる譬えを語るべきではないか、と。しかし、イエスは、そのようには語りませんでした。そこがこの譬えの急所でもあると思うのです。

実を言うところの譬えは、イエスが私たち一人ひとりの能力をどのように見ていたかを示してくれる貴重な譬え話だと言ってよいのです。15 節には「それぞれの力に応じて、一人には 5 タラントン、一人には 2 タラントン、もう一人には 1 タラントンを預けて旅に出かけた」とあります。ここには何とはっきりと誤解の余地のないかたちで「それぞれの力に応じて」と記されていることでしょうか。そうです。イエスは、人間は皆、等しい能力を持っているとは考えてはいません。それぞれ異なる能力を持っていることを認めているのです。このことは意外と思われるかもしれませんが、よくよく考えてみれば、当然のことです。イエスはありのままの事実を、率直に告げておられるのです。理数系に強い人、文系に強い人、スポーツに強い人、音楽に強い人、こつこつと忍耐強く仕事のできる人、チームワーク作りの得意な人、想像力の豊かな人などなど、人間は実に多様です。皆が皆、平等に同じ能力を与えられているなんてことはありません。人は一人ひとり違うのです。ただ、その事実をイエスは、はっきりと踏まえるのです。実は、この事実を曖昧にしないできちんと受けとめることは大事なことです。その事実を受けとめられないが故に、かえって様々な妬みや焦りや不安の思いにとらわれる私たちがいるからです。

もちろん、イエスは、一人ひとりの僕の存在の軽重を語っているわけではありません。そうではなくて、それぞれ人間の、それぞれの人生に、その人にふさわしい、異なる能力と固有の使命が与えられていることを告げたかったのです。

### 3 番目の僕の問題点

18 節には「1 タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた」とあります。三番目の僕は、1 タラントンを元手にして、それを更に増やそうとはしませんでした。なぜでしょうか。その理由は 24 節、25 節に記されています。「御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です」。

この僕は、主人から預けられた 1 タラントンを横領したり、着服したわけではありません。ただ主人を恐れて自己防衛に走ったのです。主人の信頼と委託に応えて、責任的に使命感をもって人生を歩むことを放棄したのです。言い換えれば、臆病風に吹かれて、冒険することを回避したのです。明らかに主人は、預けた金を、この僕があたかも自分の金であるかのごとく自由に大胆に用いることを期待していたのでしょうか。しかし、この僕にはそれができませんでした。自らの手前勝手な思いこみの中で、主人を「厳しい方」と決めつけ、恐怖に捉えられてしまいます。固まってしまって、動けないのです。まさにそのこ

とにおいて見事に主人の信頼を裏切ってしまうのです。ここでこの僕が、1 タラントンを土に埋めたということは、結局、彼は、自分の人生そのものを墓穴に埋めて葬ってしまったということではないでしょうか。自分の自分らしさ、自分の人生の意味、その固有の価値を、葬ってしまったということです。

ところで、この僕が、こんな振る舞いに出ってしまった理由としては、もう少し別の面から考えることもできるかもしれません。つまり、「主人が厳しい方だから、恐ろしくなって」という僕の言い訳を、額面通りに受けとらないのです。実のところ彼は、主人の厳しさを恐れたのではなく、むしろ自分が他の二人の僕たちと比較して、過小評価され、少ない財産しか預けてもらえなかったことを妬み、僻んだと、とることもできるでしょう。要するに、ふてくされて居直り、主人の信頼に応えることを自分の方から放棄してしまったのです。となると、ここで彼が「厳しい方だから、恐ろしくなって」と、とってつけたような理由を持ち出したのは、まさに自分の怠惰と僻み根性を自己正当化するための言い訳にすぎないとみることもできるでしょう。

日本人は謙遜好きです。なにごとにつけ「自分は駄目なんです」「自分は駄目なんです」と言い募ります。しかし、そう言っている人が、いざ、他人から「本当に駄目だね」と言われたら、素直にその言葉を受けとめられるのでしょうか。そう言われた途端に、馬鹿にされたと腹を立て始めるに違いありません。この僕も、主人の評価に頭にくるのです。多分、この僕が願ったことは、1 タラントンしか預けられないような僕ではなく、2 タラントン、5 タラントンを預けてもらえる僕になりたかったということではないでしょうか。つまり、ないものねだりして、「自分以外の自分」になりたいと願ったのではないのでしょうか。そこで妬み、僻み、その僕にふさわしい人生の可能性を、自ら摘み取ってしまいます。それは見事に「自分を殺す」ことでしかなかったのです。

「あなたの主人の喜びの中に入りなさい」

タラントンの譬えを読みながら、私たちは、どうしても第三の僕に同情したくなるのではないのでしょうか。大抵の人は、心のどこかでこの三番目の僕と自分を重ね合わせているようなところがあるからです。なぜなら、すべからく私たちは、劣等感や妬みに苦しむ思いを持っているからです。それだけに、この第三の僕がこんなに厳しく審かれ、放り出され、滅びに渡されるのは、酷すぎるではないか、と思うのです。ここに神の愛の喜びがあるのだろうか、恵みがあるだろうか、といぶかしく思うのです。

しかしそれなら問わなければなりません。主イエスは、なぜここでこの僕の譬えを語られたのだろうか、と。もちろん、ここにいる私たち全ての者が、この1 タラントンの僕のようになって欲しいと願ってのことではありません。断じてそうではありません。自分の力にふさわしい1 タラントンを預けられたならば、それをを用いて1 タラントンをさらに生み出す働きへと一歩を踏み出す者になって欲しいのです。そのようにして、5 タラントン、2 タラントン預けられた僕と同じように、主人の喜びにあずかる者になるようにと、私たちが励まし、招いておられるのです。

21 節、23 節に、「主人と一緒に喜んでくれ」という言葉が繰り返されます。直訳すれば「あなたの主人の喜びの中へ入りなさい」という言葉です。ここにこそ、この主人の本当の姿があるのです。この譬えの核心は、「悲しみへの招き」でもなければ、「滅びへの招

き」でもありません。そうではなくて「喜びへの招き」であり、「希望への招き」なのです。何よりもここでイエスは、警えの主人に身を託して、私たちの人生が真実の喜びに満たされるようになることを、真剣に願っておられるのです。

### 3．箱根駅伝を応援して

#### 10人が完走することの難しさ

1月2日、3日と箱根駅伝が行われ、松澤建理事長を筆頭に、応援団、吹奏楽部、バトントワリング部、チアリーディング部の学生、教職員、校友の方たちが、思いと心をつなげて、本学陸上競技部の走りに心を躍らせ、力一杯の声援を送ることができたことは大きな喜びでした。生まれて初めて私も、スタートとゴールになった大手町と芦ノ湖に出向いて、2日間、精一杯の声援を送りました。

往復220キロを10人の選手が、走り抜きます。昨年は、順天堂、大東文化、東海の各大学が途中棄権し、今年も城西大学が途中棄権することとなりました。しかも優勝候補の筆頭に挙げられていた駒澤大学はシード権も取ることができませんでした。そのこと一つをとってみても、10人の選手が、皆しっかりと走り抜くこと自体が、すでに至難の業といえる過酷な競技であることが分かります。都心から国道一号をたどり、海風にさらされる湘南海岸、それから一気に標高差800mを走り抜く箱根路へと至ります。気温、風、地形、すべてがまことに変化と起伏に富んだダイナミックなコースです。長距離走のあらゆる厳しさが凝縮されたようなコースだけに、ただ単にトラックでの走力を基準にするのではなく、選手一人一人の個性と力を見極め、それぞれの区間にマッチした選手を走らせることも、監督の工夫のしどころであるに違いないのです。

#### 「忠実なよい僕」となった原晋監督と選手たち

原晋監督は、2003年11月1日に、3年で箱根駅伝出場を果たすとの約束のもと、監督に就任しました。そのためには予選会で10位以内に入賞しなければなりません。ところが、3年目の予選会の成績は、前年より3位も成績が落ちる16位と振るわず、厳しい批判に晒されたのです。しかし、その試練を乗り切って5年目にして見事に予選を突破、箱根駅伝出場を果たしたのです。

12月15日の激励会の時に、原監督が話してくれた陸上競技部の皆さんの生活ぶりが忘れられません。部員たちは、自分たちで話し合っ、全員が午後7時に集い、必ず一緒に夕食をとるようにしているというのです。しかも就寝時間は午後10時、起床は5時半、そして道路が焼け付くような夏の日も、木枯らし舞う冬の日も、毎日、毎日、走り続けるのです。選手たちは、厳しく自らを律し、自己管理しているのです。実際、駅伝を走り終えた選手たちを労う慰労会で、乾杯をした時も、私の間違いでなければ、誰一人ビールを手にする者はなく、ウーロン茶を飲んでいました。ふとどこかで似たような生活をしている人たちがいたなあとの思いがよぎりました。それはトラピストやシトーなど厳格な祈りの生活を全うする修道院の修道士たちの姿でした。アスケーゼ、禁欲などという言葉は、天袋の奥の方にしまわれてすっかり黴臭くなってしまったと思われるこの時代、ところがどっこい身近なところで生き延びていたのです。本来のアスケーゼとは、ただただ欲望を滅却するということではありません。より大きな目標のために、他の可能性を断念し、ひ

たむきに、ひたすらに一つの所に命を懸ける歩みを全とうするという事です。箱根駅伝出場とはそのような地道な努力なくしては果たしえない栄誉です。

33年前、最終10区を走った杉崎孝先輩は、ゴール150m手前で力尽き倒れ、ついに襷をゴールにもたらずことはできませんでした。その先輩の無念を晴らすためにも、今回は、どんなことがあってもスタートからゴールまで十人の選手が走り抜くことが求められたのです。それだけに選手たちには、初出場する以上の不安や緊張があったことでしょう。しかし、そのプレッシャーに打ち勝って、全員がしっかりと自分の自分らしさを生かききって、スタートからゴールまでを走りぬくことができました。6区を走った岡崎隼也君が、慰労会の席で「これまで陸上競技をやり続けてきてよかった。青山学院大学陸上競技部に入部してよかった」と語る言葉には、自分の自分らしさを存分に発揮し、一つのことをやり遂げた者の喜びがあふれていました。それこそは「忠実なよい僕」の姿だなあと思わずにはいられませんでした。陸上競技部員の名誉のためにも言うておきますが、私の授業をとっている学生で、なまけたり、いい加減な態度でテストに臨む者は一人もいません。まさに文武両道を全うしているのです。

#### 私たちが「忠実なよい僕」として歩もう

そんな輝いている選手諸君を応援し、感動し、喜びながらも、同時に私は自らの姿をも省みずにいられませんでした。この自分は陸上競技部の部員の歩みに照らして恥じない歩みをしているだろうか、と。自分の力を弁えつつ、その力を存分に発揮し、委ねられた職務に忠実に励んでいるだろうか、と。教師として、また職員として、私たちは彼らのようにひたむきに、ひたすらに走り続けているのでしょうか。そのことを棚にあげて、「今度もがんばれよ、予選を突破しろよ、シードをとれよ、そのあとは優勝だ」なぞという言葉をかけることは、おこがましいことではありませんか。だから、新しい年をデュチュールのようにではなく、1タラントンを土の中に埋めてしまった僕のようにでもなく、私たち一人一人が「忠実なよい僕」として走り続ける者でありたい。

それにしても主の年 2009 年の青山学院の歩みはどのようになるのでしょうか。リーマン・ブラザーズの倒産を契機に、世界中があっという間に、未曾有の金融危機に見舞われ、实体经济にも大きな影響が出始めています。確かなことは、私たちの前途は平坦なものではなく、むしろ箱根駅伝のように厳しい試練が待ち受けているであろうということです。すぐに思いあたることは、私立学校の受験者が減少するという事です。そればかりでなく、園児、児童、生徒、学生、院生の中には、願ってはいても、経済的に行き詰って青山学院での学びを続けられなくなる者も出てくるかもしれないということです。そのような事態が生じた時、私たちは手をこまねいてよいのでしょうか。今、この時期に奨学金のファンドを充実させることは大切な課題ではないでしょうか。派遣労働者を救済するために、ワークシェアリングということも真剣に議論されつつあるなか、イエス・キリストによって立てられた青山学院という教育研究共同体に連なる私たち教職員が、そこで学ぼうとする者を支え、率先して奨学金を充実させていく志を立てることも「忠実なよい僕」として応えていくべき課題であり、使命ではないかと思うのです。そして2009年の歩みを終えた時に、主から「忠実なよい僕だ。よくやった」と言っていただけのような歩みを全うしようではありませんか。

2009.1.8 ガウチャー記念礼拝堂にて